

水沼文三小説選集

失われた時を求めて

マルセル・プルースト、漱石・夏目金之助の視線

水沼
文三

目次

失われた時を求めて

5

林政の父、利殖の偉材
本多静六博士に学ぶ

59

失われた時を求めて

マルセル・ブルースト、漱石・夏目金之助の視線

末っ子だった漱石、夏目金之助が母を失ったのは14歳のときである。…現在で述べると、中学2年生である。わずかな記憶を元に最愛の母の姿を確かめ、それを背景に数数の名作を発表したのである。

「失われた時を求めて」その大自然の現象を眺めてみよう。

「私は母の記念のために何か書いてみたいと思うが、生憎私の知っている母は、私の頭の中に大した材料を遺してくれなかった」

「私の母は千枝と云った。私は今でもこの千枝という言葉を懐かしいものの一つとして数えている。だから私にはそれがただ母だけの名前で、決して外の母の名前であってはならない様な気がする。幸いに、私は母以外の千枝という女に会ったことがない」

（母は13、14の時になくなっただけで、私の今遠くから呼び起こす彼女の幻像は、記憶の糸をいくらかどって行っても御婆さんに見える。

晩年に生まれた私には母の水々しい姿を覚えている特権が遂に与えられずにしまったのである。）

金之助が覚えている母は常に大きな眼鏡をかけて裁縫をしていた。その眼鏡は鉄縁の古風のも

ので、球の大きさが直径2寸以上あったように思われる。

母はそれを掛けたまま、すこしあごを襟元へ引き付けながら、私を凝つと見ることがしばしばある。老眼の性質を知らない癖とのみ考えられた。

夏になると、母は終始紺無地の縞帷子かたびらを着て、幅の狭い黒い縹の帯を締めていた。不思議なことに私の記憶に残っている母の姿はいつでもこの真夏の服装なびで、頭の中で現れるだけなので、それから紺無地と縞の着物、幅の狭い黒縹子の帯を取り除いた後に残るのはただ彼女の顔ばかりになる。

母が縁側で長男大一と囲碁を打っていた状況を覚えている。御殿女中のころからたしなむ。10年以上過ぎると、二段程度の実力がある。きちんと姿勢を正し、習い始めたばかりの大一に丁寧ていねいに教えている。この情況、『2人を組み合わせた図柄』として、金之助の胸に収めてある（唯一の記念である）そう語っている。…そこでも母はやはり、同じ帷子を着て同じ帯を締めている。「いたずらで強情な私は決して世間の末っ子のように甘く扱われなかった。それでも、家中で一番可愛がってくれたのは母だという強い親しみの心が母に対する私の記憶の中にはいつでもこ

もっている」そう記している。

この母への親しみがあるからこそ、数数の優れた文学作品が生まれたのである。

金之助は次のように語っている。

愛憎は別にして、考えてみても母は品位のある奥ゆかしい婦人であった。そして、父より賢そうに誰の目にも見えた。

気難しい長兄、大いも母には畏敬の念を抱いていた。

「お母さんは何も言わないけれど、どこかに怖いところがある」

私は母を評した兄の言葉を暗い遠くの方から明らかに引つ張り出す事が今でもできる。

(しかしそれは水に融けて流れかかった字体を、屹きつとなつて漸やうと元の形に戻したような際どい記憶の断片に過ぎない。其外の事になると、私の母はすべて私に取つても夢である。途切れ途切れに残っている彼女の面影をいくら丹念に拾い集めても、母の全体はとてほほうふつするわけにはいかない。その途切れ途切れに残っている昔さえ、半ば以上は薄れ過ぎてしつかりとはつかめない)

既に述べたように、金之助は14歳のころ、現在なら中学2年生のころ、母を失つたのである。……とぎれ、とぎれに記憶に残っている母の面影、縁側で長男大いに囲碁を教えて光景は一幅の

絵画のように記念品として残っている。

「失われた時を求めて」

この情景はブルーストの文学作品の導入部分によく似ている。

「そしてあたかも水を満した陶器の鉢に小さな紙きれをひたして日本人のたのしむあそびでそれまで何かはつきりわからないその紙きれが水につけられたとたんに、のびのびまるくなり、色づき、われ、すっかりした、まぎれもない、花となり、家となり人となるようにおなじくいま、私たちの庭のすべての花。そしてヴィヴォヌ川の睡蓮、そして村の善良な人たちと彼らのささやかな住まい、そして教会そしてコンプレーとその近郷、形態をそなえ堅牢性をもつそうしたすべてが、町も庭もともに私の一杯の紅茶から出て来たのである」

ここから『無意志的記憶』がよみがえるのであった。

最初に記した金之助の回想、ブルーストのそれとびったり一致する。……両者の文学はここから始まるのである。

「吾輩は猫である」「坊っちゃん」「草枕」「虞美人草」「三四郎」「行人」「門」「それから」「彼岸過ぎまで」「道草」「明暗」優れた短編、「文学論」「断片」「日記」も、14歳のときになくなった母の姿がようやくとらえられたことよって「無意志的記憶」がよみがえり、数数の名作が生まれたのであった。

プルーストは漱石・夏目金之助より4歳下である。「パリ万国博覧会」の4年後である1871年7月、パリのオートライフに生まれた。その時、父は37歳、母は22歳、15歳の開きがある。金之助の父母と似ている。

父は後にパリ大学医学部教授、フランス衛生局総裁だったアドリアン・プルーストである。1873年、弟のロベールが生まれる。

マルセル・プルーストは1880年、9歳の時、ブローニュの森の散歩から帰って突然、ぜんそくの発作を起こす。以来、終生その症状に悩んだ。

11歳の時、コンドルセ高等中学校に入学。毎日のように緑豊かなシャンゼリゼ公園に現れ、多くの少女たちと巡り会う。

ぜん息の発作、繊細な神経の持ち主の彼は少女たちの言葉の端端に笑いさざめき、会話を楽しんだ。健康のためトルーヴィル、ディエユブ、カブール・ノルマンディなど、イギリス海峡の沿